

# 異文化コミュニケーションと国際化

川久保 精 祐

1776年に独立宣言を発して以来、わずかに214年。現在のアメリカは、あらゆる意味で世界のリーダーである。広大な土地（日本の25倍）膨脹する巨大な資本、そして世界中から集まってくる人種のエネルギーこのアメリカを克明に語ることは不可能に近い。私の2年半の体験を通して、マンモス性の奥に踏み入ってみることにした。それは決して地域区分的な分類ではなく、アメリカの特性に対する教育という面からの一つの見解に基づいたものにすぎない。

主としてアメリカの都市の持つ巨大な国際性とアメリカの現代文明、市民生活、教育の今日への歩みの一部を紹介しながら日本語や日本人の生活文化の相異点に焦点を当ててみたいと思う。

## 【A】 American cultures from a geographical point of view.

### (1) Cultures in the Big Apple; a cosmopolitan city.

新しい文化の中に、古いものを大切にしている。ヨーロッパでは、荒廃とエネルギーはかつて結合したことの無いものが、つまり、酒で言えば最も調和しないはずの異質の酒の調合に成功したカクテルの国であった。これこそアメリカ文化の真髄だとニューヨークの人は言う。それぞれの分野で一つの文明の個性的表現を作り出しているのが、ニューヨークだと感じた。中心街の5番街、6番街の人は皆言う。「金持ちはみな孤独であり、若い人達はみな貧乏であり、旅行者は何か冒険はないかと思ってほっつき歩いている町にすぎない」アメリカで聞く金持ちの話は、大体日本と桁違いであってどこまでいっても際限がない。

ニューヨークで金持ちの家に招かれて、豪華なペント・ハウス（屋上の部屋）から灯をつけた摩天楼の夜景を眺めるのはいいものだった。その家の主人が「自分たちのいるこの50階のビル全部が私の持物で、今向こうに建ちつつあるあの60階のビルも私の持物だ」というのを聞いた時、ウソでも一生に一度は自分もそう言うセリフをお客にいつてみたいものだという気になった。

この金持ちは、世界金融のメッカ、ウォール街の株式取引所の営業部長である。アメリカの経済、いや、自由世界の経済を混乱させる為には、ウォール街にミサイルを一発落すだけで充分と言われる程、ウォール街には、世界的規模に立つ金融機関が密集している。特に、そのスターが投資銀行である。

ここで働く人達の報酬は巨額に達し、世界の金融の中心地で働いているという自信と誇りがある。しかし、その背後に“Time is money”という厳しい原則が貫かれているのをひしひしと感ずるのもウォール街である。

## (2) Melting pot of Human Race.

パーティでアメリカ人同志が会って話をする時、お互いによくやり合っているのは“*What are you?*”という質問である。“*I'm an American*”という答えでは答えにならない。

例えば、“*I'm a German descent*”. 「スペイン系」「アイルランド系」などが答えである。こんな質問も答えも日本人には想像もつかない。また、日本の金持ちと違ってアメリカの富豪達は文化の保護、育成には極めて熱心である。

ヨーロッパに比べて歴史のないアメリカでは、美術館や博物館づくりには意欲的で、ほとんどこのようなパトロン持ちである。例えば、ロックフェラー財団やフォード財団は有名だが、ユダヤ系の富豪グッゲンハイムは中でもずば抜けて現代美術館、抽象絵画の美術館、図書館、音楽館、博物館を持っている。

ニューヨークは人種のルツボだから（90か国以上）、世界各国語の新聞が発行されラジオも各国語である。もっとも放送局といっても、タバコ屋の二階だったりするのもある。ダイヤルをまわすたびにいろんな国の言葉がとび出すのである。

「英語を知らないからニューヨークへ行けない」というのはあまり意味がない。英語を知らない人は沢山いる。現に覚えようとしめない。プエルトリコ人は、年々増えアメリカの教育の悩みの一つである。

ニューヨークでは、黒人問題よりもプエルトリコ人問題の方がはるかに深刻である。イースト・サイドやハーレムのスラムに住みついて、学校に行こうとしない。親も教育に無関心である（中曽根前首相の misstatement もこのあたりに原因があるのでは？）。

日本人がアメリカに来てニューヨークだけしか見ずに帰ったとしたら、アメリカの印象は著しく悪いのではないかと思う。私の場合ニューヨークをふりだしに、東部、中部、北部、西部と配置換えされ、アメリカの教育及び、アメリカ人を知る為にとてもよかったと思う。

ビジネス街とウォール街の谷間、マンハッタンに住むのは、老人か、若い独身者か、或いは新婚夫婦だと言われている。確かに、マンハッタンの真中にあるセントラルパークは「老人の森」というにふさわしい老人憩いの場所である。長く長く連なったベンチにぼんやり座って、どこを見てもなく焦点の定まらない目を宙にすえた老人達は、私達日本人にぞっとするほど孤独感を起こさせる。聞いてみると、一人息子をもった親というのが一番哀れで、息子が結婚すると当然のように親から離れてしまい、しかもお嫁さんの方の両親とは足繁く付き合うようで、女が強いアメリカ文化は、日本とはあべこべな感じがする。

アメリカの夫婦というのは、おかしなもので男性は自分の男らしさ、強さ、たくましさを誇示し、女性は女性で自分の優美さ、弱さ、美しさなどを何かにつけ強調してみせる。その点日本の方が気を使わずにすむのは気楽と言えるだろう。ところで、気を使うことと言えば、渡米する前に英語の本でトイレで戸を叩かれたら“Some-one in”と答えればいいと勉強していったのだが、いざアメリカに行ってみるとこんなことは全く必要ないことがわかる。ニューヨークに限らずアメリカのトイレはドアの下が40センチもあいていて、いちいち戸を叩かなくとも中に人がいるかどうかわかる。このドアすらない所もあった。婦人用トイレだって、ドアの下が40センチもあいていて私の女房ときたら何と

も恥ずかしくいやだったようだ。そこへいくと、アメリカの女性はもうなれきたものである。日本の女性の中にはあまりにもあわてて、タイム・ライフ・ビルのような超一流のビルのトイレでも、水も流さずに派手に用をすます無礼？ な女性がいると言われている。

ニューヨークの女性で最初にびっくりしたのは、帽子にスーツ、ハイヒールとまずどこから見ても派手なレディが、やおら街角のごみ箱から新聞を拾い、つつたまま読み始めたことである。こんなことはしばしばで拾うだけでなく、自分もっていた雑誌を捨てて、捨ててある他の雑誌を読む人によく出くわす。

経済観念が発達しているというか、合理主義というか、逆に日本の使い捨て習慣に不安を感じる。日本人の使い捨て文化からリサイクル (recycle) 文化への教育が急務ではなからうか。

世界のトップレベルの商品がずらりと並んでいるのは5番街ですが、本格的なショッピングとなれば、そこから少し離れた7番街ですが、店に入ると買物相談係というのがいて“May I help you?”と言って近寄ってくる。お客に買わせた分だけ歩合が入ることになっているから至って熱心である。「日本人を狙え」が教育だそうである。“just looking”と言っておかないと不用な物まで買わされる。ところで、ニューヨークと違ってアメリカ人は「美しい都市を見たかったら、ワシントンへ行け」と一昔前は言ったそうである。世界でも指折りの計画された都市で、アメリカデモクラシーを象徴する。ホワイトハウスと国会議事堂、各記念塔があって美しい（偉大な政治家のモニュメント）そこでは、ケネディ大統領時代に完成した米ソ首脳間直接通信のいわゆるホットラインのテレタイプ線が、世界の平和を維持しているようである。このホットラインは、ホワイトハウスとクレムリンを結ぶ。実に緊張する世界情勢の中樞神経であろう。この町が、世界の力を集めているところで、世界の政治家が一度は来て演説をしないと一人前ではないと言われるくらいである。世界を動かすワシントンならではの名物名所ではあるが、ここにも悩みがある。最近、頭の痛い問題がもち上がった。ワシントンは全米でもっとも人種差別のない都市とい

われている。その為、黒人は年々増える一方でこの黒人達が町の東部一帯にスラム街をつくってしまったのである。そして今まで“美しい都市づくり”に関心の深かった人達が、ぞくぞくワシントンを捨てて郊外へ逃げ出しはじめたのである。問題はそれだけではない。ワシントンの人口は100万と言われているが、その60%を黒人が占めるようになり、3年前に行った時は「いまにワシントンで白いのはホワイトハウスだけになるよ！」とワシントンの白人たちはこう言って最近のワシントンを嘆いていた。黒人文化と白人文化のハーモニーがワシントン文化の夢であろう。

### (3) Cultures in the heart of America.

さて、アメリカの工業地帯であり、商業の中心地はどこだと想像されるだろうか。世界一の農機具メーカーのインターナショナル・ハーベスト工場、世界一の家庭電器工場のゼネラル・エレクトリック工場、世界一の製鉄会社 U・S スティール（もっとも今は教育産業都市になっているが）、世界一のマーチャングイズマート、ここでは、世界の農産物の相場を支配している所で、商品の国籍はさまざまでいわば常設の国際見本市である。また、世界の通信販売のメッカもここである。有名なのは、「シアーズ・ローバック」「モンゴメリー・ワード」シアーズでは、一日に数10万通の郵便の注文（メールオーダーシステム）があり、機械で封を切られた注文書は、まず調査室へ廻されそこで注文主の信用状態が調べられると、直ちにベルトコンベアーでそれぞれの倉庫へ廻され、注文の品はまたたくまに包装されてトラックで積み出されていくという仕組みで少しのムダもない。どんな品物も扱っている、例えば、30,000ドル以上もするダイヤの指輪から90セントの真珠のイミテーションまで、猟銃があれば猟犬もいる。ないものが二つある。生鮮食料品と完成自動車の二つ。

それに、金持ちが集っているシカゴでは、交通戦争が空で演じられている。彼らは、道路上の交通戦争を避けて市の北部にある高級住宅地から都心へ通勤するのに自家用機を使い、町には自家用機専用の飛行場がいくつかあり、それぞれの飛行場の使用者が一年間になんと3万人（一日平均83人が飛行機の通勤

者) シカゴに金持ちが多いというのは、シカゴの公共建築物を見てもわかる。商業科学博物館の設備は世界一精巧だと言われているし、人類学の資料で有名な自然科学博物館は「順路」の標識どおりに見てまわっていたら5日間かかった。いずれも個人の寄附でつくられているところが、日本の文化施設との大きな違いである。その他、ヨーロッパのどこよりもヨーロッパの古い絵をもっているといわれる美術館、天皇陛下がわざわざ寄ったという水族館、産業博物館も個人の寄附でつくられている。高校生までは入場料無料というのもアメリカの教育と文化に対する熱心さがわかる。日本人の *billionaire* とアメリカの *millionaire* の文化意識の違いが各分野で明確に出ている。

#### (4) Cultures in the West.

現代文明の頂点に達したアメリカの一方の顔、大西部。途方もなく広大な自然との戦いが大西部の開拓の歴史であり、現代アメリカの繁栄を維持する上の精神的、物質的な大きな背景となっている。

西部のアメリカ人は、自分たちの世界に古い文化がないのを残念に思い、仕方がないから彼らは、ゴールドラッシュのころの金鉱の町をそのまま保存して名所に仕立てたり、古い自動車や機関車、当時のジープを集めて博物館を作ったり、スペイン人が200年ほど前に建てた教会を大事に保存したりしている。

広大な渓谷と滝と湖は、少数のアメリカインディアン以外誰も見た者のない太古のままの自然だった。今でも人間の匂いもしない荒々しい自然がまだ生きていて、一口に西部と言っても、ネバタ、アリゾナ、ニューメキシコ、アイダホ、ユタ等の内陸諸州を含めた西部は、日本全土の6倍にもあたり、土地の姿も気候も決して一様でないから生活文化も違う。内陸部に入ると夏の暑さなどときた日には、自動車の窓を開けておくことは絶対出来ない。窓から吹込む熱風が苦しい。不毛の砂漠の中をはるか地平線の山のかなたまでただ真直ぐ。一本のハイウェイがのびている。窓をしめきり足もとに氷を入れた洗面器を置き、それで足を冷やしたりした。時速140キロで飛ばしていても、景色が変わらないから牛車に乗っているような感じがする。こういう途方もない土地では、自動

車と飛行機が人間にとって必須の道具である。隣の百姓家へ、ミルクをもらいに行くのに娘さんが飛行機に乗って出かけるのには驚いた。

私が見た米作りの農場では、たんぼへ通うのは冷房付きの赤いキャデラックで、田植えは全て飛行機によるもみまきであった。かかしの役も飛行機が引き受けていた。だが、西部にも人が集る町もある。西部の政治経済の中心地とスラムが同居している所はロサンゼルスダウンタウンで、ここにも世界の芸術を集めた博物館があるが、「芸術は万人に開放されるべきである」という考えがアメリカであり、ここもやはり無料であるのに関心した。桁はずれに発展しつつある生産都市であると同時に、この都市を訪れる観光客の財布のヒモをゆるめさせる一大観光都市でもある。一般の都市と違う点は、歴史的な記念碑ではなくてあくまで人工的なもので、桁はずれな規模の大きさは世界に例を見ない（ウォルトディズニー、ナッツベリー、ファーム etc）。又、西部には国立公園が多く、アメリカの50の国立公園のうち、半数近くがこの地方にあり、それは雄大な自然の博物館とも言える。その総面積は、アメリカ全土の100分の1に相当するそうである。

同じ公園でも、日本の国立公園と全く違い比較にならず、第一公園に店がない。

例えば、イエローストーン公園など四国より広くイエローストーンに行ってきた日本人に「どうだった？」と聞いてもただ「すごいとこだね」というだけだった。野生の動物も全て保護され、熊や鹿などが勝手に自動車に近寄り、ときにはボンネットの上に熊に座られて動けなくなっている車も見る。場所によっては、バッファローの大群に出会ったりする。その四国ぐらゐある公園に入るのにわずかな入場料（3ドル）でいいし、人数に関係なく自動車一台につき3ドルがまたアメリカ的。その公園の中心地には事務所があり、公園警備隊がいる。事務所近くには、日本の様に個人の利益になるような施設はいっさいない。郵便局、電報電話局、病院、教会、Police stationのみである。

しかし、西部でもっとも有名な国立公園といえば、グランドキャニオンで入場料不要、それも当然、近くの町から4時間車を飛ばして砂漠地帯を2時間、

ハイウエーで一直線それが（荒野の中を）上り坂になっているとはすこしも感じられない。実にその間車は、海拔2,000メートルの高さにまで登っている。そこにヒュッテがあり、川底までの絶壁の高さは1,000メートルと書いてある。まさに、地球の溝である。

ヒュッテの番人の話では、その絶壁を馬で下り、コロラド川にまで達するのに、まる2日かかったと言う。しかし、この西部の荒野にも住んでいる人間がいる。インディアンである。

現在、アメリカインディアンは37万人の大部分がこのグランドキャニオンのあるアリゾナ州隣のニューメキシコ州の荒野で昔ながらの遊牧生活をしている。一面の乾いた溶岩台地で飲料水にも事欠くのではないかと心配になるほどのカラカラの土地である。そこで、わずかな羊と山羊の放牧の外に、石油を発見してその採掘権で金をもうけ、インディアンを見物に来る客の為のモテルを作っている種族もいた。だが、そういうモダンなインディアンばかりではない。アパッチは昔も今もたいへん排他的である。人里離れたシベキューというアパッチ部落へ行くには、舗装していない山道を三時間も飛ばさなければならなかった。さすがのアメリカも、アパッチ部落まではハイウエーをつけなかったようである。

連邦政府のインディアン対策は、黒人対策より遅れている。アパッチの家の多くは丸太や杉の枝で囲んだ三角形の昔ながらのアパッチの家である。インディアンの生活に愛想をつかした若いインディアンは都会に出ると白人扱いを受けている。そういう若者のインディアンはやっと全体の6分の1位との事である。

## **【B】 Economics and cultures from an educational point of view.**

アメリカと言えば誰でも Pioneer を想像しますが、英々辞典では

Pioneer : a person who does something first to prepare the way for



others: a settler in a frontier country: explorer.

(web) : OFr: foot soldier.

(ラテン語): pan. (歩く人)・OL, Pedonis.

これから転じて現代英語の Pants, にも文化が想像出来る。

His wife wears the pants.

=He is a hen-pecked husband.

「彼は、女房の尻に敷かれた夫である」つまり「恐妻家」

アメリカ人はこの pioneer という言葉が好きである。中学教材に必ず出て来るのが Agricultural pioneer と Industrial pioneer である。

アメリカの中学生が必ず学ぶのがこれであり、考え方はこうなのである。

「世界の国々にとって、より生産性の高い工業部門が国を興す。その工業部門の発展の為には、先ず農業部門における生産性の向上が前提条件となる。農業生産性の向上によって、工業労働の供給が可能となり、工業製品に対する国内市場が拡大されるからだ」と言う。

だから農業革命 (Agricultural Revolution) や産業革命 (Industrial Revolution) という教育を大切にしているのだと言う。教育者が異口同音に語るのは、アメリカに於ける Industrial pioneer つまり、工業化は、イギリスとは国内的条件だけでなく、国際的条件も異にしていることを強調する。中学生には難しい内容だが、アメリカの子供達は、聞き上手 (日本の子供達は暗記上手?) で、面白いとも思えない内容を、より興味深く聞きメモをとる態度には関心した。それに Field Trip (実物教育で、キャンピングしながら過ごす) には十分研究準備をして行くから質問も多い。日本の子供達の見学の様子と比較してみてください。アメリカの子供達のアクティブ文化と日本の受動 (パッシブ) 文化の違いが手に取るように分かる。

アメリカの子供達は、実物教育 (Field Trip) で国際経済も学ぶ。これは、シカゴに Field Trip の引率で行った時、生徒が学んだ内容だが、あまり興味のなかった私の脳裏に今でもその内容が焼きついている程である。経済成長の基礎的要因としての Industrialization は the Industrial Revolution を turning

pointとして自律的経済成長をとげ近代産業化へ移行したこと。Industrialization（工業化）の開始にともなって貿易の拡大、新しい経済変化や社会変化が起り、国際間の経済関係や政治が変わって来たこと、つまり資本、人口、商品の国際移動を目で見る教育が成されているのに驚いた。

「一国の経済成長を促す要因は様々ですが、最も基本的要因は工業技術の革新であり、成長のエッセンスはその教育にある」とアメリカ人は言う。

中学生でも、国際経済のメカニズム、言いかえれば商品、人間、情報など経済資源の国際的交流を学ばせている。（今、第一経済大学でこのメカニズムの水路の一役割を果そうとしていることは、大変意義があると思う）また、アメリカの高校では、各国の経済史と異文化論について詳しく勉強するが、日本の高校ではどうだろう。その中でも、日本の経済史についての授業をアシスタントとして同席したことがあるが、次の様な学習がなされていた。

日本の経済史は自給自足的な農民経済から販売を目的とする商品生産への移行過程が the feudal system から capitalistic economy、への移行、国内市場拡大の一形態から外国貿易へと図示されていた。（日本の徳川時代の経済基礎が身分的自由を認められない農民（彼らに言わせると slavish peasant 隷農）であり、土地に縛られ職業選択の自由を持たず領主から与えられた田畑を耕し一定の年貢を上納する農村社会であったことを図示されていたのである。（日本でこれほど詳しく外国の経済史を教えるであろうか）

一方、アメリカに於ける外国貿易は国内取引の延長という考え方で、商品交換の機会が国際的に拡大していった内容が、比較図示されていた。

経済とは、経世済民のこと、つまり国をうるおし、民を救うことであるが、これからは益々一国の経済では生きられず外国との交流が必要であり、自国の文化の輸出が国をうるおし、民を救うことを考えると即ち、21世紀は生産諸要素の国際移動の加速化で工業化の進展がめまぐるしく、世界各国の経済は益々世界経済の中に組み込まれ、相互依存関係を深めていく中で私達は、今何を生徒に教育という情報を通じて与えるべきかを真剣に考えるべきであろう。私は、そのためには先ず異文化を理解することだと思う。異文化と言えは中でも、

例えば、最初に話したアメリカに於ける農業機械の革命的な innovation だが

- 1833年 二頭の馬にけん引された刈取機 (reaper)
- 1838年 マコーミックによって発明された reaping machine.
- 1840年代 マコーミック社は、シカゴに本拠を移し、世界最初の部品互換方式や分割払方式による新しい販売技術まで世界に広めた。
- 1851年の ロンドン万国博覧会で、産業革命の先輩のイギリスを始め世界の人々を驚嘆させた事はアメリカの子供達でも知っている。
- 1920年には International Harvester CO. に発展。
- オハイオ州の標準農業家は、1860年には、1840年当時 3 分の 1 の労働で、同一の生産をあげたと記録がある。

昨年、トロントにおける summit で農業政策が論じられたが、アメリカは農業を本当に大切にしている国である。私の体験として、アメリカの高校生に一番人気のあったのは異文化論である。日本では、教育関係者の間でここ数年前からポピュラーな言葉になったにすぎない。アメリカでは、100年の歴史があるようだ。私達日本人に一番欠けているものが、この異文化の理解であろう。外国の文化を理解せずして、国際人であるとは言えないのではないだろうか。

日本の企業の trade friction もその国の文化、中でもその国の生活様式を理解しないが故に起こるケースが非常に多いようである。異文化の理解によっては、「日本は単一民族国家だ」などと言う。自分の国の現実も知らない人が、首相になることも将来はなくなるのではないかと思う。

例えば、私達は日常生活の中で、何気なく人や物を見る。日米会議のセレモニーに出席した壇上の日本の役人をご覧になってお気付きの方がおられるだろうか。アメリカ人はたいがい報告者の方を向いているが、日本人は、前か下を向いている。まなざしの働きに明らかに文化の差異がみられる。

アメリカ人にとって、アイコンタクトは大切なコミュニケーションの手段である。重要な話題であれば、話し手は聞き手の目をしっかりと見すえて話す。凝視は真剣な、そして誠実な態度を伝達するとされているからである。一方、聞き手も話し手から目を離さない。話し手の意図を的確につかんで、会話に関

与していることを伝えるためである。アイコンタクトの濃度は、人と人との社会関係を反映する。テーブルの座席などが、社会的記号となるのはこの為であろう。アメリカのカフェテリアには、正方形のテーブルがある。正面の席は最大限のアイコンタクトを必要とする人々の席であり、お互いに対面的に座る。友人同志が世間話をする時には、隣合せか斜め横に座る。

日本人は、どんな場合でもたいがい正面に座る。友人同志がとりとめもない話をするときも。何故かと言うと、正面に座っていても相手の目を見ないからである。

福岡空港の食堂などでよく見かけるシーンだが、アメリカ人の夫婦は長方形のテーブルを好み隣合せに座る。これは、二人が目を見合わせなければならぬ関係にないからである。日本人の夫婦は長方形でも対面的に座る。さて、座った後、日本人は相手を見るときには相手の唇のあたりを見る。それで、アメリカ人は日本人に口元をみつめられるという印象をもち、口のまわりに何かついているのではないかと心配する者もいる。日本人は、アメリカ人のアイコンタクトには耐えきれず、先に視線をそらしがちである。このことは、無意識のうち相手には否定的なステレオタイプのイメージにつながりかねない。アメリカ人の目は実に多彩で、グリーンやブルー、その中でも濃度が人によってずいぶん違う。心情による輝きの変化もよく見える。アメリカ人は、相手の目の色を、握手のときの握力とともによく覚えている。アメリカ人の目をよく見ると、ネクタイやスカーフの色と同じであったりして、自己表示の手段としていることも分る。

国際経済学科が、異文化コミュニケーションを目標にするならば、このような伝達機能をもつ「まなざしの文化」についても考えていかなければならないだろう。

それでは、指導者である教師にとって「国際化」とはなんであろうか。

さて、近頃、「国際化」という言葉を聞かない日はない。さまざまな人が、さまざまな立場から使っている。教育関係の人々が口にする言葉のうちで最も頻度の高い言葉だそうである。

今、高等学校の教育改革が進められている中で、学科の新設が行なわれているが、「国際」という言葉をつけた学科が多い。「国際科」「国際英語科」「国際教養科」「国際文化科」「国際人文科」それに「国際経済学科」がある。

「国際化」という言葉は、教師や政治家が一番好きな言葉だと思う。戦後間もなく日本人は「文化」という言葉が気に入って、「文化なべ」まで出現した頃を思い出させなくもない。

このように、「国際化」という言葉が盛んに使われているが、その示す実体は極めてあいまい、多義であり、理解するのに難儀する。そして「国際化」を英語で“internationalize”とか“internationalization”と訳しているが、日本に来ている米国人講師や英国人には意味が分らないという反応を示すことが多い。「きまって肩をすくめる (shrug one's shoulders)」最近のように、多数の外国人が日本の学校に入ってくるようになると、いろいろな場で、「文化摩擦」が起こるのは当然である。大切なことは、文化摩擦が起こらないように、世界の生活文化を知ろうと努力することである。そういう意味で異文化を学ぶことは勿論、自国の文化を知らせることが国際人としての必要条件であり、“internationalization”であると思う。

国際化と言えば、日本人の議論下手もそのマイナスイメージの一つである。各県の AET の日本人教員に対する不信感が意外に強い最大の理由は、心を開いて彼等と議論しないからである。

日本人が、自分の profession である英語の学習指導について議論を避けるのを理解出来ない様である。AET が習慣の違いに狼狽して自分の率直な気持ちを日本人教師に説明してアドバイスを求めると、突然“*When in Rome do as the Romans do*”と言って会話の糸口を断ち切ってしまう教師が多いのに不満を持っているようです (friction?)。

国際理解を促進するというのは、相手の意見に耳を傾けると同時に、日本の文化についても外国人に説明することだと思う。When in Rome do as the Romans do. という。

英語国民も知らないような諺まで知っている人が、何故コミュニケーション

を避けるのか全く不満のようである。この諺を日本人教師がよく知っているのは、受験英語の成果であろう。日本人は諺を使うことが好きな国民だという指摘もある。

コロンビア大学のレスリー、ビービ教授が「異文化時代の英語」の中でこう書いている。

\* 日本人の英語の使い方について私が集めた事例に、断りかたに関するものがある。状況として、掃除婦が、花瓶を壊して弁償を申し出たとする。高価な花瓶だったが雇い主は掃除婦が払い切れないと思いを断った。「過は人の常 (To err is human)」。アメリカ英語でも、その他の地域の英語でも諺を引用するのはひどく高みにたっているように響くのである。

諺は、日本人にとって、信条や信念を述べる時に使うのが普通のことで、それが英語でも話す時に出てしまうのである。大切なことは、相互に意見をぶつけ合うことであり、意見が正しいかどうかということではないのである。彼等が最も大切にしている言葉である、constructive feedback を身をもって示すことであろう。意見のぶつけ合いの中で、相手の言うことに耳を傾け、自分の考えを修正する柔軟な精神を身につけるように努力することが「国際化」に最も必要である。

国際交流の為の、spiritual communication だけにとどまらず、異文化への好奇心を若者に起こさせる必要があると思う。例えば、誰にでも簡単に、しかも楽しくできるのがジェスチャーです。アメリカでは、相手国のジェスチャーの研究が盛んに行なわれている。辞書にもある。

人と人とのコミュニケーションでは、ジェスチャーも言葉に劣らず重要な役割を果たす (body language)。同じ形をしたジェスチャーでもずいぶん意味が違うものがある。少し前になるが、グロムイコ外相が、レーガン大統領を訪問した時のことである。会談後、二人は記者会見に応じた。カメラマンがシャッターを切ろうとするとグロムイコ外相はきまって両手を握り合せて高々と持上げた。この姿を「ニューヨーク・タイムズ紙」は、「まるで勝ち誇っているかのようだった」と報じた。“as if he were in triumph” すぐに記事に対して投書

があり、「このジェスチャーはロシア人にとって友情のシンボルであり勝利を強調する意味などまったくない」と訂正された。6月初めのゴルバチョフ大統領も同じジェスチャーをして、アメリカ市民の welcome に答えていた。

今やアメリカでは、アメリカ人とソ連人の直接ふれあう機会が増大するのを予想して（ソ連の異文化 communication を進める為の）身振りなどの正しい理解に取り組んでいるようである。body language にも異文化がある。従って

政治制度や文化様式が違ふと、相手の身体の動きが奇異に映るだけでなく、不快に感じられるのである。

こんな例がある。日本人は、うなづくことによって英米人と同様に「賛成」「同感」の意味を表す。しかし日本人はそればかりではなく、「あなたの話はよく分ります」とか「あなたの話を聞いています」ということも示す。これは私の経験ですが、英語を聞くとき、一語一句理解出来ると、うなずいてしまうので、しきりに頭の上下運動を繰り返すと、話の順番の交替をせまっているように英米人にはとられることがある。

日本文化に深く根ざしたしぐさである為、これを矯正することは極めて困難である。むしろ日本人のしぐさの意味が誤解されないように相手に正しく説明する必要がある。英語で言うとなつたり、agree with~, しても、agree to~, しないこともあり得、また反対に、agree with~しなくても、agree to~することもあり得る。話はややそれますが、言葉も又文化的背景なしには生まれていないことがよく分かる。毎年7月・8月は進学講演で質問を受ける内容にこの agree with. agree to の問題が出て来る。学校文法では、agree with+人、agree to+事柄。と教えるが実際の言語活動では、言語を含む文化というものがある。

入試問題集に、

A: I agreed with your proposal at the meeting this morning, It was a good one.

B: You should have backed me up then when I needed it.

とあり、Aの with は誤りではないかと言う質問です。

具体的にふれてみますと、

agree with him と言っても実質的には him で指された人の意見や述べた人の事柄を意味するもので、

him の代わりに his opinion などの名詞句が来ても構わない。  
 view  
 statement

このような事は容易に理解出来ると思う。

しかし、agree with～には意見に従って実行するという含意がない。

ところが、agree to～には実行するという含意があることまでは学校英文法では説明していない (agree to～=promise to follow)。

英米では agree with の後に plan や proposal も共起可能であるのに、学校の文法試験には、固定概念で出題されているというのはこっけいである。

agree with your proposal は別におかしくないことになる。

これに反して、もし、agree to your proposal. とすると、AはBの提案に心で賛成するか賛成しないかということに関係なく、ともかく提案に従うような態度をとったことになる。

私を含めてであるが感心出来ないのは、英語教師の場合には英語という見地からだけ英語を考えがちであろう (英文法書の上に頼ろうとする)。

これからの英語教師に求められるのは、英語を楽しく学ばせ、異文化への好奇心をわかせる工夫が必要だと思う。とは言っても、英語学習が楽しいとか、おもしろいとか感ずる感じかたにはいろいろあって、人によっても、時と場合によっても異なるものであるが、一般的には、主として次の5つの面から考えねばならないと思う。

#### ① 意外性・新奇性

おもしろいことも繰り返されると面白みは減退していく。いつも次に何をやるかが分っている授業は、意外性がなくおもしろくない。授業の中に適度の新鮮味、次に何が出てくるのだろうかという期待感と「ええっ！」という意外性。“Pattern Practice”を重要視するのは危険とも言える。

(例) drink を「のむ」と覚えていて、突然「drink ≠ のむ」が具体的に文脈の中で提起されるような場合。



日本語の「のむ」の対象は広く、水でも薬でも、タバコでもご飯のかたまりでも「のむ」であるが、英語の drink の対象は、液体に限られ、通常の飲料水でないものや薬や毒物は除外される。

(意外性の利用)

## ② 発想・文化などの知的発見

英語学習は、「文句を言わずに覚えなさい」という丸暗記の強要になりやすい。覚えようという意欲のない生徒に（特に大学生には）強要しても逆効果でしかない。英語と日本語の間には、発想のしかたに類似性と異質性がある。

(例) 日本語の「兄弟」と英語の“brother”は異質な面がある。英語の世界では、普通「兄」か「弟」は区別しない。生活文化の違いなのである。私達が経験することであるが、「ガンバレ」と日本語でいうところを、英語では“Take it easy”などと言って緊張感を解きほぐそうとする。また、「一か八かやってみよう」は英語で、One or eight I'll try, とは言わない。言葉には文化があることがよく分る。

このように言葉は生きている。人間存在の基本に深くかかわった根幹をなすものである。それ故、英語という言葉と発想・文化とのつながりを学ぶことによって、他の教科からは得にくい知的発見の喜びを感得することが出来るのである。

## ③ 現実の生活とのつながりをもたせる。

新幹線のアナウンスで、

We'll soon make a brief stop at Kokura.

The train will arrive at Hakata Terminal in a few minutes.

と言うが、普通の例文に比べて主語と動詞の使い方の違いを現実感を持って学習することが出来る。

生徒の人格や現実の生活とのつながりが大切にされなければならない。

(その他の例)

レストランのメニューの英語「コーヒーのお代り無料」

Another cup service 「もう一つのカップ奉仕」

Free refills

free は「タダの」、refill は「詰め代えるものに」特にもとの容器を利用しての詰め代えに使い、消火器の交換消化剤や、万年筆の代えインクもこれに該当する。

Haw about another cup of coffee? の another cup を利用したまではまずまずだが、「サービス」も誤って使いすぎ、とんだ誤解を招く英語である。サービスと言えば、バーゲンなどの「サービス値段」は bargain price か reduced price. 「これはサービスです」のタダの意味なら、This is free (free of charge) 「これをサービスします」がおまけなら、I'll throw it in. This will be thrown in と言う表現指導。

b. 次によく生徒が犯す誤りですが、

「私の家はとても狭い」

My house is very narrow. では何故理解してもらえないのか考えてみよう。英語人は思うでしょう「そうですか。キミの家は奥行きに比べて間口が狭い、つまりウナギの寝床 eel's bed というヤツなんですね」「細長い」ではなく「小さい」small を用いるべきであるのに、日本人の英語では、誤った表現がおこる。つまり文化の違いなのです。

c. 外国のレストランでは、給仕が (waiter) お客の注文に来て必ず言うのが、

(給) Your order, please.

(客) Steak, please.

(給) How would you like your steak?

次に日本人によくある間違った表現ですが、

(客) I would like it overdone.

overdone 「焼きすぎた」を使った為に「炭火焼？」なるステーキを食べさせられることが、よくある。

ついでですが、medium, rare も指導すると、生活に密着した英語の授

業で、生徒にとって英語学習も楽しいものとなるでしょう。

④ 四番目に大切なことは和製英語研究である。

(例)

ア. image up → improve the image.

イ. image down → destroy the image.

ウ. madam killer → ladies' man

エ. old miss → old maid. maid は「少女、若い未婚女性」

オ. panty stocking → panty hose.

カ. running shirt → undershirt.

ランニング用なら running wear.

キ. towelket → towel blanket.

ク. back mirror → rear view mirror.

ケ. family size → economy size.

コ. golden hour → prime time.

サ. His hair style is all-back → His hair is combed back.

⑤ 最後に授業のモノトーンを避け、活性化の為には冗談・シャレ・ユーモアが必要である。

一見しただけの実用的知識に偏重すると、「専門馬鹿」的な薄っぺら人間になりやすい。ご存知のように、

欧米諸国では、授業中にユーモアとウィットを大切にする。

「ジョークやシャレは科学的思考にも通じる重要な営みである」アーナルド・ケスラーの言。

a. 私の経験から

(私) I'd like to try on that suit in the window please.

(assitant)

I'm sorry sir, you'll have to try it on in the changing-rooms like everybody else.

b. What is the chief cause of divorce?

— marriage.

c. 有名な劇作家バーナードショーが、有名なダンサー、アサドラ・ダンカンからラブレターを貰った。

「あなたの秀れた頭脳と私の豊かな肉体を持った子供のことを考えてみて下さい」と結婚を迫る女優に、「誤って私の肉体と貴女の頭脳を持った子供のことも考えてみて下さい」と断わったのは有名な話である。

「英語は、学ぶと面白いものだからしっかり勉強しなさい」という言葉では、生徒の心に響かない。

具体的なイメージが浮かばないからである。

例えば、日本語と英語との間の訳という活動の問題点の中にも面白い題材がある。

日本語の「すみません」=I am sorry. にはならない。

- ① (人にあやまるとき) I'm sorry.
- ② (感謝するとき) Thank you.
- ③ (相手に助けを求めるとき) Excuse me, but~.

ところが、翻訳型の学習は、場面や発想の問題はあまり留意されていないから生徒にインパクトを与えない。日常生活でよく起こる事柄について、文化的背景を考える学習をする。少し大げさに言えば、こうした指導が国際理解につながると言っても過言ではない。

先頃、成田空港の税関の“alien”という表示が取り去られてしまったが、“alien”は unfavorable な connotation をもつ “foreigner” より更に悪い排他的な語である。即ち、日本に来て日本語をある程度知っている外国人は“gaijin”と呼ばれるのを好まないのと同じである。アメリカの大学でも、外国人留学生の面倒をみる office を “Foreign” を避けて “International Student Center” と呼んでいる。

私達も、“foreigner” や “alien” は、できる限り避けてそれが可能な文脈では、“people from abroad” とか “visitors from+国名” など connotation を配慮した表現を使うように心がけることが、国際人として必要ではないだろう

か。その為には、もっと異文化学習に真剣に取り組まねばならない。

最後にもう一つ、特に最近、英語も大切であるが、日本語の力がどんどん落ちて来ているということである。

The Asahi is a daily newspaper. の訳をさせたところ「朝日新聞は、毎日新聞ですか?」と答える学生が50%以上であった。

言葉は、言語の背景・基盤になっているさまざまな文化（勿論日本語、日本文化も含めて）への常識程度の知識が必要である。また、それへの好奇心を育てるような教育が大切であろう。

例えば、日本語の新聞でいいから、政治や国際面を毎日読む習慣をつけさせるとか、そうすれば、世界的な大問題となっている SALT (Strategic Arms Limitation Talks 戦略兵器制限交渉)・SDI (Strategic Defense Initiative. 戦略防衛構想) を有名な映画の題名「スター・ウォーズ」で日本語でも表現することを知らない学生はいなくなるはずである。

最後に、私見ですが、これからは真の国際化教育達成の為に、国際学校 (International track school) を作るべきであろう。こういった学校にこそ日本が必要とする国際的人材を生み出させると思う。そう言った意味から、第一経済大学でも、異文化学習の為に、海外語学研修プログラムを始めたのは、本当に素晴らしいことである。

1 昨年、トロント・サミットで、竹下首相が言う55億ドルの発展途上国への無償援助もいいが、現実の問題としては、国際経済学科へ外国人学生、特に発展途上国からの学生が多数留学することになれば、(無償)日本は教育界でも世界の指導的立場に立ち、日本の国際化の一翼をになうことになるだろう。

世界に比類のない程の近代化が、日本のいろいろな分野でなされているのに。

日本は、経済大国ではあるが、生活大国ではないと言われるのはそこにある。それに、生活で大切な消費者教育がなされていないのが日本である。

アメリカでは、1962年(昭和37年)ケネディ大統領が提唱した消費者保護法を作り、4つの保護策が制定された。

#### ① 商品についてのモニター

- ② 見えない商品についてのモニター
- ③ 企業についてのモニター
- ④ 国の政策についてのモニター

10年後の1972年（昭和47年）には、学校教育に取り入れている。経済の国際性に伴う教育として大切だからである。

例えば、目に見えない消費部門が一番モニターが必要。特に、金融部門について“loan shark”という書き出しで消費者教育が徹底している教育は、国家の概念と無縁ではないのである。

日本は、この“loan shark”による被害が今なお終わらないのも、消費者教育が遅れているからである。

こと教育となると、どうしても改革が進まない中に各大学や高校で、国際経済科の設置は大いに意義がある。

日本人にも外国人にも魅力ある教育内容にすべきであろう。そして第一経済大学が他大学に遅れないためにも、英語という見地からだけ英語を考えないで、経済の国際性に伴う教育として、異文化への好奇心をわかせる工夫としての米国、又は英国大学とのコンタクトをして、異文化を直接学ばせる。勿論日本文化を知るチャンスを与えることにもなると思います。つまり異文化教育の先導的立場に立ち、国際化の一翼をになって行きたいものです。「異文化時代の英語」として異文化コミュニケーション教育を重視し、グローバルな青年を育てなければならない時代にあると思う。